



ブルゴス大聖堂

スペインのほぼ中央に位置する首都マドリッド。そこから北に百キロのところにブルゴスがある。

ティアゴ・デ・コンポステイラへの巡礼路は複数ある。ポルトガルルート、イギリスルート、スペインの北の海岸ルート。そして最も巡礼者が多いフランスルートは、フランスからピレネー山脈を越え、ブルゴス、レオン・アストルガ、セブroidとスペイン北部を横断する。

我々が巡礼したのはこのフランスルート。どここの街に行っても立派な聖堂があるが、スペイン三大聖堂の一つと言われるブルゴスの大聖堂は世界遺産であり、天使のように美しいと表現される。



世界遺産のブルゴス大聖堂

写真でもわかるが重

厚な壁の一階部分と、二階から尖頂にかけての部分は趣が異なる。ヨーロッパの大きな聖堂は長い年月をかけて建設された。ブルゴス大聖堂の一階部分はロマネスク様式で、建物は柱と壁で保たれている。

〈ゴシック様式〉

ところが時とともに建築技術が進歩し、天井を肋骨状の骨組みで補強し、建物は柱で支えるようになり、壁部分が少なくなった。

ブルゴス大聖堂の二階から上はゴシック様式となり、窓が大きく、そこにステンドグラスが入れられて聖堂は一段と美しくなった。

また石の透かし彫刻の技術が発達し、尖頂部分は絹織物のように見えたほどである。さらに聖堂の各入り口のファサード（建物正面）も実に手が込んで美しさを加えた。

キリストの母である聖母マリアに捧げられたブルゴス大聖堂が完成したのは一三二二年。フランスのノートルダム寺院、シャルトル大聖堂とともにゴシック様式の代表的建築物である。現地のガイドさんの説明によると、ブルゴス県だけで教会は千五百修道院は五十を超え、街全体が歴史を感じさせ、タイムトンネルで中世に遊ぶ気分になった。

前回、魂の歌声と題してグレゴリオ聖歌を紹介したが、ブルゴスにあるベネディクト会のシロ修道院の修道士が歌ったCD「チャント」が、一九九〇年代の初めに世界的にヒットした。今、この原稿をそのCDを聴きながら書いているが、本当に魂に響く歌声である。

〈権力の象徴？〉

さて、天に向かって高く美しくそびえる聖堂は、神への賛美と聖母マリアへの崇敬のあらわれであると同時に時の権力者の力の象徴という面があったのではないだろうか。

美しいブルゴス大聖堂のファサード



聖堂の中にある権力者の墓を見て、そんな思いがした。純粋な信仰の教会から、時の為政者の権力と教会が結びついて絶大な力を持つ教会になった時、教会は神のものから人のものとなり、墮落したのではないだろうか。

ドイツの聖書学の大家教授であったマルチン・ルターは当時の教会に疑問を感じ、教会の刷新を求めたが、それが異端とされて破門された。

それが今日のカトリックとプロテスタントの二つの教派を生み出した宗教改革なのだが、観光名所になっている大聖堂を見ながら私も現代の信仰のあり方をいろいろ考えた。（元山口放送取締役ラジオ局長）